

神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による

HISATO
OSAWA 第5回
記念 これまでの
名曲を集めて

大澤 壽人 V
スペクタクル

2017/11/26 sun
日

開場／13時30分
開演／14時／ロビー展示あり
場所／兵庫県立芸術文化センター
神戸女学院小ホール

Contents

目次

第5回 記念

これまでの名曲を集めて

演奏会に寄せて

生島 美紀子

P. 2

ごあいさつ

大澤 壽文・佐智子、本庄 徳子

P. 3

神戸女学院所蔵資料

「大澤壽人遺作コレクション」と

2冊の目録『煌きの軌跡』

P. 4

プログラム

P. 5

出演者プロフィール

P. 7

プログラム・ノート

「これまでの名曲を集めて」 生島 美紀子

P. 9

大澤壽人先生の生涯

P. 15

評伝『天才作曲家 大澤壽人

—— 駆けめぐるボストン・パリ・日本』

P. 19



大澤資料プロジェクトの 普及活動と「大澤壽人スペクタクル」シリーズ

本日は〈大澤壽人スペクタクルV〉にお運び頂きまして、有難うございます。

戦前にボストン・パリを駆けめぐり、戦中と戦後は関西を拠点に目覚ましい音楽活動を展開された天才作曲家、大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）先生の作品を紹介する演奏会〈スペクタクル〉は、第5回記念会を迎えました。

先生の華麗なキャリアは、昭和初期に「世界楽壇で通じる一流音楽家」と認められたことによって築かれました。留学中の1933年にボストン交響楽団を指揮した初の日本人になったこと。1935年にコンセル・パドゥルー管弦楽団を指揮したパリ楽壇デビューが大成功だったこと。日本作曲界の黎明期に、欧米で喝采を浴びた数々の成果は快挙でありました。

しかし戦後、先生は活動の絶頂期に47歳で急逝なさいます。以降、大澤家は自筆譜を中心に3万点に及ぶ遺品資料を半世紀以上も保管され、ご長男壽文氏は2006年に、そのすべてを神戸女学院に寄贈なさいました。

「大澤壽人遺作コレクション」と名付けられたこれらの貴重な資料群を、私たちは5年をかけてすべて調査し、2冊の作品目録、『煌きの軌跡』及び『同II』を編纂しました。その過程で姿を現した先生の音楽活動の全貌は、驚くほど豊かで、内容も量も素晴らしい1000曲近くが遺されていたのです。

それを知った私たちは、学校での学術調査とは別に、「大澤資料プロジェクト」を設立しました。2009年から〈スペクタクル〉を始め、自筆譜のまま眠っている作品を掘り起こし、先生の音楽の普及活動に努めています。これまでに器楽・声楽の両分野にわたって、《ピアノ協奏曲第一番 イ短調 二台のピアノ版》《小デッサン集》《シャンティ》など8曲の世界初演、《空の幻想》《ナイトモローグ》など4曲の日本初演のほか、《丁丑春三題》《つばめに託して母の歌える》など、9曲の名作の復活演奏を行ってきました。

〈スペクタクル〉は画期的な音楽会として評価されています。今回はこれまでに人気の作品を中心に、選りすぐりました。広大で多彩な、大澤壽人先生の音楽の世界をどうぞお楽しみくださいませ。

生島 美紀子（大澤資料プロジェクト代表）



Preface

演奏会に寄せて

Greetings

—
ごあいさつ



本日はご多用のところ〈大澤壽人スペクタクル〉にご来場下さいまして、誠に有難うございます。

2009年12月から始まった〈スペクタクル〉も早いもので8年が経ち、本日第5回を迎える事が出来ました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と深く感謝いたしますと共に、大澤資料プロジェクトはじめ、関係各位の皆様のご尽力に心から感謝いたしております。

父、大澤壽人は本年2017年で生誕111年を迎えます。47歳という若さで亡くなりましたが、大変充実した音楽活動をしたと思っております。

この節目の年、父の誕生日の8月1日に、生島美紀子先生が書かれた『天才作曲家 大澤壽人——駆けめぐるボストン・パリ・日本』がみすず書房より刊行されました。父の生い立ち、幼少の頃から亡くなるまでの、私たちも知らなかった音楽との関わりなどが詳しく記されており、今さらながらに驚いております。

また9月3日には東京サントリーホールで、山田和樹氏指揮による日本フィルハーモニー交響楽団によって、父のボストン時代の作品である《交響曲第一番》《コントラバス協奏曲》の世界初演が実現しました。特に《交響曲第一番》は、舞台いっぱいの大編成オーケストラが迫力ある演奏を繰り広げ、スケールの大きさに感動しました。27歳の若さで、しかも初めての交響曲で、よくこのような作品を作曲出来たなと思わず涙がこぼれました。

本日は〈スペクタクル第5回記念〉として、大澤壽人のボストン・パリ留学時代の作品から晩年の朝日放送ラジオ番組「ホームソング」で歌われた曲など、バラエティに富んだ作品をゲストの方々も含めて、演奏していただきます。最後までごゆっくりとお楽しみいただけましたら幸いです。

この〈大澤壽人スペクタクル〉が未永く続きますよう、今後共ご支援賜りますよう心からお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

大澤 壽文・佐智子
本庄 徳子



神戸女学院所蔵資料

「大澤壽人遺作コレクション」と2冊の目録『煌きの軌跡』

大澤壽人先生の遺品は「生誕100年」にあたる2006年に、長男壽文氏から先生が教壇に立った唯一の学校、神戸女学院に寄贈された。自筆譜約1万枚を中心に、パート譜、演奏会プログラム・ポスター・チラシ、作品表と創作ノート、写真、録音テープ、日記、書簡、愛用の指揮棒など、総数約3万点を超える膨大な資料群である。

「大澤壽人遺作コレクション」と命名され、学院の宝となった。

コレクションのすべては、特別編成チーム（後に「大澤資料プロジェクト」となる）によって学術調査と目録編纂が進められ、2冊の目録が刊行された。『煌きの軌跡——大澤壽人作品資料目録』（2007年）は、先生の旺盛な創作活動を世に伝えたとして、2008度音楽クリティック・クラブ特別賞を受賞。『煌きの軌跡Ⅱ——神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録』（2011年）は、研究のための基礎文献となった。作品毎に情報を集めた網羅的リストに加え、「大澤壽人略年譜」「作品年譜」「演奏会と公演一覧」「放送一覧」「ABCホームソング集一覧」が付されたのである。

その結果、幻とされていた先生の音楽活動の全貌が、初めて明らかになった。寄贈前に70余りと思われていた作品総数は、作曲・編曲を合わせ1000に近い。創作ジャンルも演奏会用作品から放送音楽や映画音楽、宝塚や松竹歌劇団への舞台音楽、校歌に至るまで多岐にわたり作風も多様。ラジオを拠点にした指揮歴も華麗の一語に尽きる。第二次世界大戦をはさむ激動の時代に、作曲・編曲・指揮・教育を含む驚異的な活動を展開し、見上げる業績を遺しておられたのである。こうして目録刊行は、日本洋楽史において、先生の存在を改めて問うことになった。

尚、「大澤壽人遺作コレクション」の楽譜は電子資料化が完了している。コンピューターによる閲覧と自筆譜コピーも入手可能である。

詳細は神戸女学院図書館

(TEL: 0798-51-8565, kclmsg@mail.kobe-c.ac.jp) まで。



Program

プログラム

「大澤壽人先生の生誕111年」

生島 美紀子(Lecture)

I部

ホームソングと帰国時の歌曲、ボストンのウルトラモダン派

猫の子あげますいらっしゃい／竹中 郁詩(1952年9月西宮)

ロンディーノ／立居 寛詩(1936年10月神戸)

周防 彩子(Sop) 蟻川 千佳(Pf)

ABC朝日放送ホームソング集(1952-53年西宮)

つばめとはとのすれちがい／竹中 郁詩

山のぼりの歌／谷川 逸子詩

虫売り物語／結城 みどり詩

電車の中で／西浜 保詩・喜志 邦三校訂

去年の服／佐々木 とよ詩・竹中 郁校訂

木の下のワルツ／石山 清三詩

神戸市混声合唱団(Chor) 金月 里紗(Pf)

ソナチネ ホ短調(1933年5月ボストン)

Sonatine in E Minor for Pianoforte Solo

第1楽章 速く活気をもって Allegro con brio

第2楽章 ゆるやかに アダージオのように Andante quasi adagio

第3楽章 速く生き生きと 戯れるように Allegro vivo scherzando

小倉 直子(Pf)

休憩15分

II部

パリデビュー作品と帰国後の名品

ヴァイオリン小協奏曲「支那詩」(1936年神戸)

Concertino for Violin Solo and Orchestra "To a Chinese Poem"

第1楽章 速く活気をもって Allegro moderato

第2楽章 アダージオのよう Quasi adagio

第3楽章 やや幅広く遅く～はなはだしくなく速く Larghetto ~ Presto non troppo

眞田 彩(VI) 須山 由梨(Pf)

ピアノ伴奏版編曲 生島 美紀子

晩秋／渡辺 勉詩・安西 冬衛校訂(1952年11月西宮)

桜に寄す ピアノ伴奏版(1935年10月頃パリ)

Une voix à SAKURA pour soprano et orchestre, Arrangement pour piano

篠原 美幸(Sop) 蟻川 千佳(Pf)

丁丑春三題(1937年神戸)

Trois morceaux de printemps "Teichu"

第1曲〈春宵紅梅〉夜想曲 遅くNocturne : Largo

第2曲〈無為即興〉ゆっくりととても表情豊かに Impromptu désœuvré : Andante molto espressivo

第3曲〈春律醉心〉奇想曲 やや速くはっきりと Caprice : Allegretto marcato

小倉 直子(Pf)

Profile

出演者プロフィール



ピアノ

おぐら なおこ
小倉 直子



ソプラノ

しのはら みゆき
篠原 美幸

桐朋学園大学卒業後、パリに留学。エコールノルマル音楽院を演奏家資格を得て卒業。パリ国立音楽院ビエール・サンカン教授の薰陶を受け、フランス国内外で演奏活動を行い、洗練されたテクニックと音楽性を絶賛された。帰国後はデビューリサイタルで「ライオンズ音楽賞」受賞。協奏曲のソリストとして出演を重ね「第1回咲くやこの花賞」受賞。ザ・シンフォニーホールのリサイタルは満場の聴衆を集め、大成功を収めた。この間マルセイユ音楽院バルビゼ教授に招かれ、同地でリサイタル開催。リスボン国際音楽コンクール審査員を務める等、幅広い活動が高い評価を受けている。

大阪教育大学大学院修了。「奏楽堂がおくる日本歌曲のすべて」等の他、《カルメン》ミカエラ役、ソリストとしてヘンデル《メサイア》、マーラー《復活》、R・シュトラウス《4つの最後の歌》等、数多くの演奏会に出演。NHK-FM「名曲リサイタル」出演の他、ソロリサイタルでも高評を得る。「第11回奏楽堂日本歌曲コンクール歌唱部門第1位」「第5回松方ホール音楽賞大賞」等を受賞。技術と解釈に支えられた豊かな音楽性は、特に日本歌曲の分野において絶賛されている。現在、大阪教育大学、武庫川女子大学、京都女子大学、大阪府立夕陽丘高校音楽科講師、関西二期会会員。



ピアノ

にながわ ちか
蜷川 千佳



ピアノ

すやま ゆり
須山 由梨

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。ヤマハJOCにテレビ出演し、2004年ポーランド国立クラコフ室内管弦楽団と共にソロの他に伴奏者としても活動を続け、「大澤壽人スペクタクル」には初回から出演。現在、関西二期会、堺シティオペラ各ピアニスト。神戸女学院大学、四條畷学園高等学校非常勤講師、西宮音楽协会会员。

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。大学在学中にハンナ・ギューリック・スエヒロ記念賞、特別伴奏賞を併せて受賞。大学院修了後はイタリアへ渡り、ボリス・ベクトレフ氏のもとで研鑽を積む。「KOBE国際音楽コンクールピアノC部門奨励賞」等を受賞。現在、関西二期会オペラ研修所伴奏ピアニスト、神戸女学院大学音楽学部伴奏要員。



ヴァイオリン
——
さなだ あや
眞田 彩



ソプラノ
——
すおう あやこ
周防 彩子

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業後、ロンドンに留学。英国王立音楽院ヴァイオリン科を首席卒業。1813年設立のThe Royal Philharmonic Society Emily Andersonを2003年に審査員全員一致、日本人歴代2人目として受賞。Tunbridge Wells International Young Concert Artists Competition 第3位。ART GOYA International Festival Queen Violin 2013招待出演。NHK-FM、BSフジ、京都オーディオ・ホテル・栗田山荘「京の七夕」、記念式典等への出演も多く、多彩な活動を続けている。現在、大阪音楽大学付属音楽院さくら夙川校ヴァイオリン講師。

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学院音楽研究科修了。KOBE国際学生音楽コンクール、大阪国際音楽コンクール等で入賞。ウィーン国立音楽大学セミナーに参加、現地での演奏会に出演。関西二期会オペラ《夢遊病の女》アミーナ役でオペラデビューを主役で飾る。その他、《魔笛》パミーナ役、《ファウスト》マルグリート役など数々のオペラに出演。《第九》ソリストとしても好評を博す。NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演。現在、神戸女学院大学非常勤講師、関西二期会会員。



こうべしこんせいがっしょうだん
神戸市混声合唱団

金岡伶奈・端山梨奈・丸山晃子(ソプラノ)
高原いつか・村井優美・八木寿子(アルト)
総毛創・谷口文敏・眞木喜規(テノール)
池田真己・武久竜也・西尾岳史(バス)
金月里紗(ピアノ)

1989年神戸市により設立されたプロの合唱団。豊富なレパートリーを持ち、「音楽のまち神戸」推進に大きな役割を果たしている。2005年、阪神・淡路大震災10年目にアシュケナージ指揮NHK交響楽団とモーツァルト《レクイエム》を共演。2018年3月11日(日)定期演奏会は「大澤壽人合唱曲作品展」と題し、岩村力指揮により、サトウ・ハチローの詩による音楽劇《たぬき》ピアノ伴奏編曲版を初演する。



企画 &
レクチャー
——
いくしま みきこ
生島 美紀子

神戸女学院大学音楽学部を経て、スタンフォード大学大学院修了。音楽学で日本人初のM.A.取得。大阪大学大学院博士後期課程修了。アルチュール・オネゲルの研究論文により博士号取得、同論文を出版。2006年より「大澤壽人遺作コレクション」に携わり、編集代表した資料目録『煌きの軌跡』は音楽クリティック・クラブ特別賞を受賞。以来、講演会や演奏会主催を通して大澤氏の音楽の普及活動にあたっている。現在、大澤資料プロジェクト代表、神戸女学院大学非常勤講師。

V
大澤壽人
スペクタクル

プログラムノート

「これまでの名曲を集めて」

生島 美紀子

< I 部 >

ホームソングと帰国時の歌曲、ボストンのウルトラモダン派

大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53年)の創作期は、I:留学前(22-29年)、II:ボストン・パリ留学期(30-35年)、III:帰国から終戦まで(36-45年)、IV:戦後から晩年まで(45-53年)の4期に区分される。

『猫の子あげますいらっしゃい』はIV期の作品で、1952年9月から始まったABC朝日放送のラジオ番組「ABCホームソング」第4回で流れた。独唱は神戸女学院の教え子の小松周子、大澤指揮のABCラジオオーケストラとABC放送合唱団による初演だった。

詩人の竹中郁は関西学院の先輩で、大澤の声楽作品の中で最も多いのは、この先輩の詩を取り上げたものである。猫好きだった大澤のために書かれ、歌は詩と相まって、65年も前に作曲されたとは思えないおしゃれな味わいをもっている。

「猫の子あげます いらっしゃい」竹中 郁詩

猫の子あげます いらっしゃい
子猫八匹 ひげもある
きんぎん きん茶
みどりの目玉 光ります
紙袋はいや 風呂しきはいやよ
バスケットもって いらっしゃい

『ロンディーノ』はIII期の作品。1936年2月、パリの大成功を土産に帰国した大澤は、東京と大阪で帰朝演奏会を開いて成果を披露した。翌37年も同様に、作品発表会を開催。当時の日本作曲界で年2回も交響大作を発表する唯一の作曲家だった。

大澤は37年から神戸女学院の教壇に立っており、同年4月7日に日比谷公会堂で開かれた「大澤壽人 作曲指揮交響演奏会」は同学院同窓会めぐみ会東京支部主催である。『ロンディーノ』はこの時に発表された管弦楽伴奏歌曲で、大澤指揮による新交響楽団(現在NHK交響楽団)とソプラノ独唱長門美保によって演奏された。本日は作曲家自身が編曲したピアノ伴奏版を演奏する。

「ロンディーノ」は小型のロンド形式を意味する。立居寛の詩は「うたはいづみに めぐります」の行が循環し、音楽も巡りながらA-B-A-C-Aの小ロンドを形成する、やわらかな春の歌である。

うたはいづみに めぐります
そよかぜに みどりの かけさせば
ほのかに をとめの ふえのねして
はる はる はると みづにうたふ

こころは あをぞらにさり
ふえのね くもとゆくしばし
いこふおもてに うきくさのかけさせば

うたはいづみに めぐります
そよかぜに みどりの かけさせば
ほのかに をとめの ふえのねして
はる はる はると みづにうたふ

みづにみどりのきて
うたはかぜとさるころも
をとめののぞみはかわらず ふえのねさらす

うたはいづみに めぐります
こころ わかばに かけおへば
ほのかに をとめの ふえのねして
はる はる はると みづにうたふ

混声合唱で歌われる〈つばめとはとのすれちがい〉〈山のぼりの歌〉〈虫売り物語〉〈去年の服〉〈電車の中で〉〈木の下のワルツ〉の6曲は、〈猫の子あげますいらっしゃい〉と同じく《ABC朝日放送ホームソング集》に含まれるIV期の作品で、晩年の1952-53年に作曲された。

戦前から戦中を経て戦後へとわたった大澤の創作期を通して、主たるメディアはラジオだった。朝日放送(Asahi Broadcasting Corporation)は51年に放送を開始。大澤は音楽担当としてこの民間放送に関わり、開局日には大澤作曲による「朝日新聞ニュース」のためのテーマ音楽が流れた。

「ABCホームソング」は大澤のレギュラー番組で、平日の定時に同じ歌が放送された。週が替わると歌も替わり、毎週新しい歌が生まれた。だが、第49週を迎えた時に大澤は急逝、シリーズは突然中断した。敗戦からの復興期に創作された《ホームソング集》の清々しい作風は、大澤が人々に贈った色とりどりの「歌の花束」と言うにふさわしい。

番組では管弦楽伴奏で放送された。自筆総譜は失われたが大澤自身が編曲したピアノ伴奏版が遺されているので、本日演奏する。

第10曲、竹中郁詩による〈つばめとはとのすれちがい〉は、汽笛を鳴らしながら東海道線を走る当時の特急列車を歌っている。初演独唱は石井亀次郎。

つばめの運転手はあごひもかけて
はとの運転手もあごひもかけて
東海道線をかけぬける
かけものこさずかけぬける
つばめとはとのすれちがい
富士のあたまのかがやく日向

HISATO OSAWA PROGRAM NOTE

第45曲、谷川逸子詩〈山のぼりの歌〉は、健全な明るさを目指した番組の主旨を反映している。初演独唱は樋本栄。

むくむくむくと 湧く雲へ
もくもくもくと 歩く道
小道は空へ むいてくる
心はあかるく 風にのる
ヤッホーヨッホー ヤッホーヨッホー
木(こ)の間(ま)がくれに こだまゆく

第44曲、戦争孤児が歌われた〈虫売り物語〉は結城みどり詩で、まだ終戦から8年の当時をうかがわせる。初演独唱は木村斗伎子。

虫売り リンリン チンチロリン
国には親もないそうな
灯ともし頃の人通り
虫はリンリン チンチロリン

第22曲、佐々木とよ詩〈去年の服〉は健全な心身の成長を温かく見守る。初演独唱は神戸女学院出身の山本智子。

去年の服をだしてきて
去年の服をきてみたら
やっぱり 穴が一つある
袖もみじかい 膀もでる
去年のままの躯なら
去年の服も着られるが
こころも躯ものびたのよ

第47曲、西浜保詩〈電車の中で〉はホームソングに数曲みられる鉄道歌の一つ。戦後復興の明るい側面が映し出されている。初演独唱は樋本栄。

満員電車がゆれている
お客様もみんなゆれている
それでも平氣でお嬢さん
レースの袋を編んでいる

第49曲、石山清三詩《木の下のワルツ》は1953年10月11日からの週に放送された。その直後の10月28日に大澤は亡くなり、ワルツを好んだ作曲家の心優しさを伝える遺作となった。

雨をさけて たたずんだ
町の並木の たそがれに
ほのかにきく あのワルツ
花のワルツの やさしさよ
むせぶ夜霧に せまるしらべ
花のかわり みちるここちの
かげにうるむ 思い出よ
君がえくぼの いとしさよ

II期の1933年5月に完成した《ソナチネ ホ短調》は、ピアノ独奏作品の中で最も規模が大きい。ボストン留学期4年のうち、後半には気鋭のウルトラモダン派として大澤は同地音楽界で知られており、そうした大澤を支援してボストン日本協会が、作品展を2回主催している。《ソナチネ》はその2回目、34年5月の作品展でボストン大学同級生のA. ゲッツによって初演された。

作品は3楽章から成る。「ソナタ形式—中間楽章—ロンド形式」は大澤が生涯をかけて追求した楽章構成で、II期からIV期の作品にまで亘っている。

第1楽章「速く 活気をもって」は、ホ短調の第1主題とロ長調の第2主題が明確に提示されて伝統的なソナタ形式を踏襲しているが、変拍子の多用や広音域のダイナミックな用法など、独創的な近代ソナタ形式の特色を備えている。

第2楽章「ゆるやかに アダージオのように」は、冒頭2小節の旋律が変容する発想力に満ちた楽章。冒頭旋律が再登場するので全体を二部分形式と言うことはできるが、旋律を主題として展開するという西洋式の音楽展開はみえず、音のイメージが幾重にも塗り重ねられたり、淡く漂ったりする、日本的な感性にあふれる独自の音楽である。

第3楽章「速く生き生きと 戯れるように」は、和音の後打ちアクセントや旋律の複雑な連符など、即興性がそのまま取り入れられた性格をもつ。三連符が連続する部分を中心として、コーダを持つ小ロンド形式 A-B-A-C-Aが形成される。音楽の流動性と爆発力が際立つ楽章である。

《ソナチネ ホ短調》の創作は、大澤がこのジャンルで日本最初期となる《ピアノ協奏曲》を作曲していた時期に並行している。パリではデュカに見せた自信の作である。独奏曲でありながら、音域の拡がりやアーティキュレーションの細かさがオーケストラの各楽器を想起させる、内容豊かな代表作の一つである。

＜Ⅱ部＞

パリデビュー作品と帰国後の名品

Ⅲ期の作品《ヴァイオリン小協奏曲 支那詩》はパリから帰国した1936年に作曲され、翌37年4月7日に「大澤壽人 作曲指揮交響演奏会」で発表された。《ロンディーノ》発表と同じ会である。演奏は大澤指揮の新交響楽団、ヴァイオリン独奏日比野愛次で、初演者に献呈されている。

楽章構成はボストン以来の「ソナタ形式一中間楽章一ロンド形式」をとり、当日のプログラムには、以下の作品解説が掲載された。

第1楽章 第1主題はヴァイオリン独奏によって奏され、それが伴奏部の管弦楽と交互に展開していく。

第2主題はリズミックな伴奏に対照する滑らかな旋律である。極く短い展開部が現れる。

第2楽章 諧謔的な即興曲である。一夜香港の裏町で聞いた町の音楽師の印象がかすかに含まれて居る。

第3楽章 ゆっくりしたイントロダクションの後、速くて軽い気分を持ったロンドで終わる。

終わり近くにヴァイオリン独奏のカデンツァが数度伴奏部と交互に出て来る。

本作品には作曲家によるピアノ伴奏版が存在しないため、〈スペクタクル第5回〉に際し、新たにピアノ伴奏版を編曲した(2017年生島美紀子による)。本日はそのピアノ版の世界初演である。

《晩秋》は《ABCホームソング集》の第11曲で、1952年11月に放送されたⅣ期の作品。渡辺勉の詩に基づく歌はシンプルなようだが、言葉のリズムに生かして交替する2拍子と3拍子や繊細な和声が、温かな雰囲気を創り出している。初演独唱は森春子。

柿の実が赤く露に熟れたよ
ほら あんなに高く
けさ梢に百舌鳥が
ひとこゑ百舌鳥が
キリリと鳴いたから
秋ももうしまいだよ

1934年にボストンからフランスに渡った大澤は、翌34年11月に自作自演と指揮による演奏会を開催し、大喝采を浴びた。キャリアのピークとなる華麗なパリデビューだった。《桜に寄す ピアノ伴奏版 Une voix à SAKURA pour soprano et orchestre. Arrangement pour piano》はⅡ期の作品で、パリデビューの晩に人気を博した芸術歌曲の分野の代表作。私たちに馴染みの古謡《さくらさくら》が、流麗な歌曲に変身を遂げている。作曲家による歌詞は自筆譜にローマ字書きされ、ロシア人ソoprano、M.クレンコが日本語で歌った。本日は大澤自身によるピアノ伴奏版を演奏する。

ああ、ふるさとの春の想いは
さくらさくら と歌うころ
弥生の空は 見渡すかわぎり 霞みか雲か 匂いぞ出する
(ハミング)花に慕うとも いにしえのままに歌い
いざやいざや 見にゆかん

パリデビューでは《桜に寄す》の他に、《ピアノ協奏曲第二番》が世界初演された。この時独奏を務めたフランス人ピアニストが、H. ジル=マルシェックスである。彼は1925年以来、来日を重ね、当時の日本楽壇にドビュッシーなどのフランスのピアノ作品を紹介した功績で知られる。

『丁丑春三題 Trois morceaux de printemps "Teichu"』はⅢ期の作品で、パリで親友となったジル=マルシェックスが帰国した大澤を追うように4度目の来日を果たした際、神戸で初演された。「丁」は十干の「丁」、「丑」は十二支の「丑」で、創作された1937年が「丁丑」にあたる。春にまつわる3曲から構成され、それぞれに副題がつけられている。

第1曲〈春宵紅梅〉は「夜想曲」と書かれ、大澤が尊敬するドビュッシーの影響が色濃い。柔らかな分散和音に始まり、最弱音に消えていくきわめて繊細な音楽である。分散和音の中心音「嬰ヘ」と中音域の旋律の中心音「嬰ト」が両立し、心地良く進むにつれ、嬰トが低音域の構造音に変化する見事な書式で作曲されている。

「とても表情豊かに」と指示された第2曲〈無為即興〉は、断片的な旋律やうごめきを感じさせるリズム型から構成される。春の空気を感じさせる「漠とした印象」は、実はきわめて緻密なプランによっており、第1曲とは印象が全く異なるため気付きにくいが、2曲を通して旋律と構造の中心音が統一されている。

第3曲〈春律醉心〉は「カプリス／奇想曲」で、春爛漫の気分に満ちている。花見の醉客の足取りの様なパッセージで始まり、やがて聞こえてくる《元禄花見踊り》の一節が宴の賑わいを想わせる。人々の上機嫌を写すかの如くに駆け上がるパッセージは、日本の旋法2種の組み合わせで、西洋の「複調」の日本式応用である。その上行パッセージの勢いとグリッサンド効果の中で、《元禄花見踊り》の冒頭が派手に鳴って終了する。

『丁丑春三題』は西洋の作曲法を完璧に身に付けた大澤によって「日本の春」が色鮮やかに描き出される。80年前に作曲されたと思えないほど瑞々しい作品は、国内外で活躍する日本人ピアニストのレパートリーにふさわしい名品である。

01

忘却と平成の復活劇

大澤壽人は戦前は欧米、戦中・戦後は日本で活躍した作曲家・指揮者である。日本が敗戦から復興中に急逝したこと、活動がラジオの時代であったこと、関西の私学出身であったことなどが重なり、欧米楽壇で認められた華麗なキャリアにも拘わらず、没後は半世紀以上も忘れられた幻の存在だった。

1999年、音楽評論家片山杜秀氏と神戸新聞藤本賢市記者によって、大澤家に保管されていた自筆譜が公になり、2003年以降《ピアノ協奏曲第三番 変イ長調 神風協奏曲》(1938年作曲)の復活演奏やCDリリースが続くと、戦前の作品とは思えぬ斬新な作風で一躍脚光を浴びた。「平成の復活劇」の始まりである。現在は急激に進む再評価によって、日本洋楽史を書き換えようとしている。

02

出生から 関西学院高等商業学部卒業まで

大澤は1906年(明治39)8月1日、愛媛県出身の両親のもとに、二男四女の長男として神戸で生まれた。父壽太郎は神戸製鋼所創業時からの技術者、母トミは信仰の篤いクリスチヤンで、大澤は幼小の頃から兄弟と共に日曜学校に通った。音楽との最初の出会いは、オルガンと讃美歌である。

1920年、関西学院中学部に入学。グリークラブに属して山田耕筰の後輩となり、高等商業学部に進学する頃にはオーケストラ部にも入部。また学院オルガニストを務めるなど、音楽とキリスト教が密接に結び

つく環境で成長した。その間、神戸居留の外国人、ピアニストのA. ルーチンやP. ヴィラヴェルデに師事し、自ら神戸オラトリオ協会を設立して指揮者となり、関西学生音楽界のスターとして知られた。作曲家を志すきっかけは25年に初来日し、神戸に巡演したフランスのピアニスト、H. ジル=マルシェックスのリサイタルを母校の中央講堂で聴き、感銘を受けたことである。

03

アメリカで花咲く才能と 日本初のボストン響指揮

1930年、同院を卒業した大澤はアメリカに渡った。東京音楽学校(現在東京藝術大学)に本科作曲部が設置される前年という時期で、留学生の多くがヨーロッパを目指す中、大澤は宣教師の人脈によりボストン大学音楽学部に入学。日本人初の作曲専攻生となり、独学だった作曲法を初步から始めた。当時のボストンは、創立50年を迎えたボストン交響楽団を擁する世界的な音楽先端都市であり、大澤はその定期演奏会会員となって「現代音楽」を浴びるように聴いた。並行して作曲の勉学では直ちに頭角を現し、2年目にはピアノ独奏曲《人形のうた変奏曲》がアメリカのラジオ局から放送されるほどだった。

1932年9月にはニューエングランド音楽院にも入学。F. コンヴァースに師事した頃から才能が一挙に開花する。当時最先端の作曲法の一つ、「四分音」を用いた《チェロソナタ》をはじめとして、約半年で300枚以上の楽譜を書き上げる「怒濤の創作期」が訪れた。この時期に書かれた《小交響曲》は、33

年6月12日のボストン大卒業式の晩に、日本人として初めてボストン響(ポップスオーケストラ)を指揮して披露した作品。《ピアノ協奏曲 イ短調》は日本最古のピアノ協奏曲の一つである。

卒業後の1934年には、アメリカに移住したA.シェーンベルクやアメリカ前衛派の作曲家たちの影響を受け、ボストン響常任指揮者のS.クーセヴィツキに献呈した《コントラバス協奏曲》やコンヴァースと評論家A.マイヤーに献呈の《交響曲第一番》など、大作を次々に完成。大澤はボストン音楽界や前衛派のR.セッションズが嘱望する「和魂のウルトラモダニスト」に成長を遂げた。前者は天才の本領が發揮される独創的な作品、後者は戦前の邦人作曲家による交響作品として、最大の規模を誇る。大澤はボストンの4年間で未完成作品を含めると約35曲、総譜総数にして約1000枚を書き上げて、ヨーロッパに向かった。



1933年ボストン大学卒業式

華麗なるパリ楽壇デビュー

04

1934年9月、経由地ロンドンでBBC響指揮者W.プレイスウェイトの知己を得て、翌月大澤はパリに到着。早速《交響曲第二番》に着手し、早くも年内に完成した。35年1月にはエコール・ノルマル音楽院に入学。大家P.デュカのクラスに入り、名教師N.ブーランジェのプライベート・レッスンにも

通い始めた。旺盛な創作力はさらに増し、作品への助言をもらおうと《ピアノ協奏曲第二番》を僅か3ヵ月で書き上げた。

1935年11月8日には「大澤壽人 仏日交響音樂会」を開催し、華麗なパリ楽壇デビューを果たす。名門コンセル・パドゥルー管弦楽団を率い、サル・ガヴォーにおいて、作品発表と指揮を披露する演奏会を開いたのである。当日は、J.イベルやフランス六人組のA.オネゲルやD.ミヨー、加えてC.ケックラン、H.ビュッセル、A.グレチャニノフ、A.チレープニンなど、20世紀前半の西洋音楽史を飾るきら星のような大作曲家たちが来場。大澤は《交響曲第二番》、ジル=マルシェックスの独奏で《ピアノ協奏曲第二番》、M.クレンコの独唱で管弦樂伴奏歌曲《桜に寄す》を世界初演。ラヴェルやサン=サーンスのフランス作品も含め、すべてを指揮した。

結果は、作品も指揮も絶賛を博し、将来を祝福する演奏会評は大澤を「日本からのパリ楽派」に例えた。当時のパリは政治的な混乱によって自国を逃れた外国人、「パリ楽派」が活躍する華やかな楽壇で、上記のグレチャニノフやチレープニンがそうである。また、世界中から音楽の徒が集まり、ピアノの原智恵子や作曲の平尾貴志男や池内友次郎も留学中だった。この地でいち早く作品発表を行い、パリ楽派と称えられた功績は「戦前の日本洋楽史における快挙」であり、大澤は日本人として稀な、華麗なキャリアを築いたのである。



1935年 パリ演奏会プログラム

05

帰国から戦中の日々

1936年2月、足かけ6年に及ぶ留学を終えて帰国。5月と6月に東京と大阪で開催した大澤の「帰朝演奏会」は、凱旋的な意味合いをもつはずだった。だが、欧米と母国の落差は想像を超えるものだった。「世界的レベルの作曲家」という評価は通用せず、時局はあまりにも暗かった。先鋭の作風を成長半ばの日本楽壇は理解できず、帰国直後に起きた二・二六事件によって軍部の支配力が強大化する時勢だったのである。

4月から神戸女学院の教壇に立った1937年は、7月に盧溝橋事件勃発。日中戦争下で発表された《ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲》は愛国的でないと非難され、その後は戦局の影響で、演奏会での作品発表が段々困難になった。厳しい時代を迎えるが、このことは逆に、大澤を新しいジャンルの開拓へと向かわせた。JOBKラジオ(現在NHK大阪放送局)のスタジオや宝塚や松竹歌劇団の舞台、映画音楽の分野などに才能を注ぎ込み、手がけた放送作品は約130、舞台用音楽は約20、映画音楽は約40におよぶ。

1940年5月「紀元二千六百年奉頌演奏会」では、日本武尊と國を称える大交声曲《海の夜明け》、出征兵士の母の想いを伝える《つばめに託して母の歌える》を発表。6月ラジオではM. ラヴェルが戦没の友人に捧げた《クープランの墓》



1936年 帰朝演奏会

の指揮本邦初演を行うなど、戦中の音楽活動には激動の時代が直接に反映している。私生活では12月に宝塚歌劇団に在籍する15歳年下の奥田澄子(月瀬梅香)と結婚した。

06

戦後の大活躍

戦後は「音楽による復興」の意識を強く持ち、上質で親しみやすい「中間層の音楽」の普及を目指した。ジャズ風の《ペガサス狂詩曲》(1949年)や《トランペット協奏曲》(1950年)を作曲して、BKの音楽番組「シルバータイム」から放送。「日本シンフォネットオーケストラ」などポップス系3団体を設立して専属指揮者となり、詩人・画家・舞踊家・映画監督たちと共同制作の輪を広げた。こうした活動を続けながら、欧米で認められたオーケストレーションの技術をさらに磨き、作曲の世界に匹敵する編曲の世界を築いた。宝塚スター越路吹雪のための《ビギン・ザ・ビギン》編曲(1950年)はその一例である。

1951年は、NHKに次いで民間放送が始まる時期だった。11月開局のABC朝日放送には、準備段階から携わった。52年9月からは2つのレギュラーパン組、「ABCホームソング」と「ABCシンフォネットアワー」を毎週担当。企画・作曲・編曲・指揮のすべてを引き受け、他の仕事も控えることなく続ける超人的な活動を展開した。同年10月には東大寺の法要にちなむ《大佛千二百年祝典譜》を作曲し、文部省芸術祭参加作品音楽賞と民間放送

連盟音楽賞をダブル受賞。11月にはABC開局1周年のための《電波へのハallelヤ》が続いた。

1953年になると、8月に西宮球場に2万人以上の聴衆を集めた「たそがれコンサート」を指揮、9月にG.メノッティのオペラ《電話》を訳詞・編曲・指揮して本邦初演、10月に脚本から作曲・指揮まですべてを手がけた放送オペラ《邯郸》^{かんたん}を発表。輝くキャリアを持つ時代の寵児は、関西文化圏の中心で多忙を極めていた。



1950年、大阪毎日新聞写す

07 寵児の急逝

しかし、そんな大活躍の日々は突然に終わりを告げた。欧米での再活動を考えていた矢先の1953年(昭和28)10月28日、大澤は過労のため出先で倒れ、搬送先の病院で帰らぬ人となる。追悼記事や番組、追悼演奏会が続き、関西樂壇はリーダーの喪失を嘆いた。

そして没後半世紀以上を経て、劇的な平成の復活劇が起こるのである。

08 平成への遺産

大澤が遺した作品は、作曲・編曲合わせ、1000に近い。留学地でのウルトラモダンな演奏会用作品から戦中・戦後の映画音楽やラジオ歌謡まで、手がけたジャンルは幅広い。

天才は音楽と共に、日本作曲界の黎明期から戦後の混乱期までを駆け抜けた。その47年の生涯は流星のような煌きを放ち、作品は現在の私たちをも動かす生命力を保っている。



パリ時代



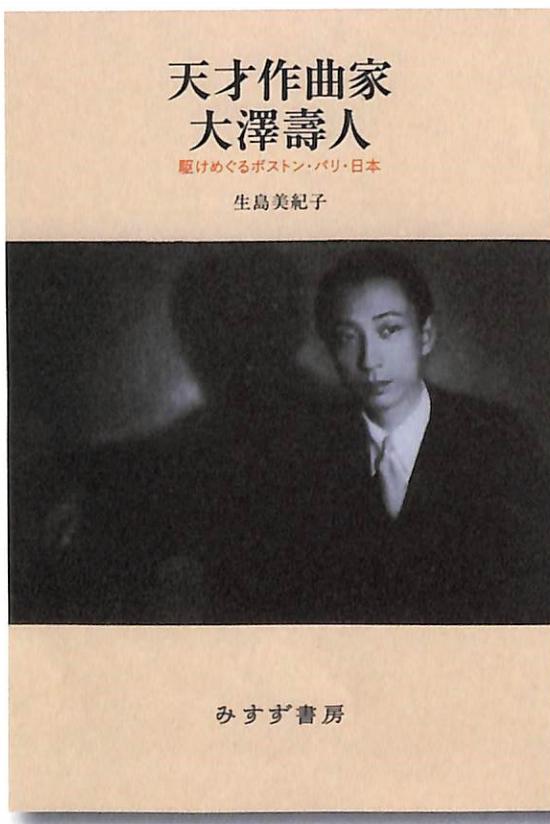
帰国後、愛用のベヒュタイン製ピアノの前で

天才作曲家 大澤壽人

駆けめぐるボストン・パリ・日本

生島美紀子 著

千に及ぶ曲を世に送った稀有な作曲家
半世紀余りの沈黙を経て蘇る、その生涯と作品



[目次抄]

- 第1章 出生から関西学院中学部卒業まで
- 第2章 関西学院高等商業学部の青年音楽家
- 第3章 アメリカで花開く才能
- 第4章 ボストン交響楽団指揮と「交響四部作」
- 第5章 パリ楽壇デビュー
- 第6章 帰朝演奏会と当時の日本楽壇
- 第7章 日中戦争下の日々と神戸女学院の教壇
- 第8章 太平洋戦争開戦
- 第9章 戦後の彩り
- 第10章 1950年代の幕開け
- 第11章 審命の急逝
- 第12章 平成の復活劇

附記 大澤壽人の姓の読み方と生年
あとがき
大澤壽人略年譜

ディスコグラフィーと楽譜
大澤壽人・作曲作品名索引
外国人名索引／漢字および日本人名索引

ISBN 978-4-622-08629-1

大澤壽人（1906-53）。神戸に生まれ育ち数々の交響曲や協奏曲などを世におこった天才作曲家、ボストン交響楽団で日本人としてはじめて指揮台に立ち、パリでも活躍したこの稀有な存在は、歿後なぜ突然忘れられてしまったのか。最近になって再発見・再評価が始まったのは、どのような理由からか。膨大な資料と聞き書きからその生涯と作品を見事に再構成した評伝。多彩な人物とともに、日本のクラシック音楽黎明期の詳細も伝える。

四六判・592頁・定価5,616円（本体5,200円+税）

2017年8月1日刊

東京都文京区本郷 5-32-21
113-0033



みすず書房
<http://www.msz.co.jp>

tel.03-3814-0131 fax 03-3818-6435



Prologue プロローグ

オルガンの音は少年の心を突然とらえた。それを聞いたのが母の背中だったか他人の背中だったかもおぼろげな幼い頃の記憶だが、五つのストップがある足踏みオルガンから流れ出す音楽は、身体を貫いて染みわたった。

明治四〇年代初頭の兵庫県。ここは現在神戸市灘区と呼ばれる地域にある日曜学校。オルガンが奏していたのは讃美歌で、その日は子供達が楽しみにしていたクリスマスだった。

部屋には急ごしらえの舞台が設えられていて、ガス燈の青白い光に照らされている。少年も上がって讃美歌を独唱したが、眠たくなってきたので想い出はその光のように淡い。ほのかな追憶だが、生き生きと音楽を感じた経験は不思議な体感として鮮明に残っている。

やがて彼の家庭にも、熱心なクリスチャンだった母の希望で、音楽好きの子供たちのために七つのストップがあるオルガンが購入された。ストップを引いて強さを変化させてみたり、組み合わせて音質を工夫したり、少年は寝る時以外は弾いているといった様子でこの楽器にのめり込んでいった。

しかし、通っている小学校にある楽器はもっと特別だった。何しろストップが九つもあるのだ。柔らかくて上等そうなカバーに覆われ、講堂の壇上で堂々とした佇まいを見せてている。普段は使用されないので、音を聞く機会は始業式などの学校行事の日だけである。

少年は年に数回耳にする音にあこがれた。音楽の先生がきれいな格好をして《君が代》を弾き始めると、音が響きながら寄せてくる。家で聞いている音とはまったく異なり、きらきらと輝きながら光の束となって講堂に満ちていく。彼はすっかり嬉しくなって、胸を高鳴らせながら耳を澄ましていた。

身体に染みわたった讃美歌や心を躍らせたオルガンの響き——少年と音楽との最初の出会いである。少年の名は大澤(おおさわ)壽人(ひさと)。一九〇六年(明治三九)八月一日神戸に生まれ、長じて作曲家・指揮者・教育者となり、音楽と共に人生をひた走った。ミッショナリースクールでオルガニストをしていた頃。ボストンで一躍脚光を浴びた頃。パリで世界楽壇に名乗りを上げた頃。帰国後の教壇や戦後の寵児ともてはやされた頃。いつでも彼の行くところ、天恵の才が火花を散らし、人々の目を惹く華やかさがつきまとった。

しかし活躍の只中の一九五三年(昭和二八)一〇月二八日、予想もしなかった出来事が彼を襲う。

(以下続く、『天才作曲家 大澤壽人——駆けめぐるボストン・パリ・日本』より)

兵庫県立芸術文化センター レジデント・コンダクター岩村力氏の指揮による

神戸市混声合唱団 春の定期演奏会

神戸が生んだ幻の天才作曲家
大澤壽人合唱曲作品展

2018年3月11日(日)

14:00開演
神戸文化ホール中ホール

I部

戦後の歌の花束 《ABCホームソング集》

——四季を追って春から春へ—— ——ジャンルをめぐって遺作のワルツまで——

南谷 健一詩〈春の扉〉春	北丘 都留夫詩〈誰かが窓をのぞいてる〉ワルツ
喜志 邦三詩〈水遊び〉夏	安西 冬衛詩〈でもひょっと〉タンゴ
喜志 邦三詩〈ひまわりの歌〉夏	大竹 安喜詩〈星と歩いて〉スイング
渡辺 勉詩〈晩秋〉秋	竹中 郁詩〈猫の子あげますいらっしゃい〉スイング
安西 冬衛詩〈公孫樹のロンド〉秋	安西 冬衛詩〈泣き黒子のラブ・コール〉シャンソン
安西 冬衛詩〈冬ごもり〉冬	石山 清三詩〈木の下のワルツ〉ワルツ
竹中 郁詩〈ふみ切り〉冬	
牧 昇治詩〈薔薇の花かけ〉春	

II部

戦中の音楽劇、サトウ・ハチローの詩による《たぬき》ピアノ伴奏版世界初演!

1941年にラジオ放送された音楽劇《たぬき》は、序曲と24曲から成る。時は年に一度の秋祭り前夜。子狸たちが雌子の稽古に行く途中で、産婆のおたぬに出会い、赤兎坊が生まれたと聞く。ここでめでたい祝宴の場面となり、狸祭りの稽古へと続く。腹鼓の指導をするのは文福先生で、「わしが わたしが わたくしが 粋な若衆であったころ」と昔話を始める。これがよく知られた文福茶釜の物語である。

セリフあり歌あり、歌には浪曲調ありワルツの大合唱あり、昔話のご披露に腹鼓の絶景風景。抱腹絶倒の話を切れのよいテンポで展開させる大澤の音楽は、楽しさ満載。

指揮:岩村 力　　おはなし:生島 美紀子

「大澤壽人スペクタクルV」企画・文責・編集 生島 美紀子 デザイン 森 のぞみ



HISATO OSAWA

主催:大澤資料プロジェクト
後援:クラブ ファンタジー(神戸女学院大学音楽学部同窓会)
(公財)神戸市民文化振興財団

ABC Radio AM1008 FM93.3

発行者:大澤資料プロジェクト お問合せ:090-8232-1940 定価300円(税込)